Nuzhat al-Qulūb に見える アルメニアとジャズィーラの諸都市

井谷鋼造

はじめに

昨年の本誌に筆者は「*Nuzhat al-Qulūb* に現れるルームの諸都市」[1]と題する翻訳を発表した。その意図する所はモンゴル人支配時代のルーム（小アジア）に関する地理的情報の一つを紹介して、将来の歴史研究に役立てることにあった。ところが、歴史研究の側面から見れば、ルームに関わる年代記その他の歴史資料は数多くのルーム内外の地名を含んでいる。とりわけルームに隣接するアルメニアやジャズィーラ地方の地名についてはそれらがルームの史料に現れる頻度も高い。それ故にルームに隣接するアルメニアやジャズィーラについての地理的な情報を把握しておくことはルームに関する史料を読解する際に必須の、そして極めて有益な予備作業ともなる。

本稿で筆者は昨年の拙稿と同じ、ハムドゥッラー・ムスタウフィー・カズヴィーニーの著作 *Nuzhat al-Qulūb* を材料として、ルーム地方の記述に続くアルメニア（第三話地理誌の第二部イーラーンザミーン地誌中の maqṣad（第八章）及びジャズィーラ（同第九章）の部分を全訳する。この両地方はイスラーム教徒の支配領域に入った時期が古く、*Nuzhat* に先行するイスラーム世界の諸地理書にも必ず取り上げられてきたので、両地方に関する *Nuzhat* の記述はルーム地方についてのそれと同質ではない。にも拘らず、モンゴル人支配時代の西アジアの地理的な状況を理解する上で *Nuzhat* のアルメニアとジャズィーラに関する記述は不可欠である。それは単に類書がないというのみならず、*Nuzhat* の記述が種々雑多な、興味深い地理的、歴史的な情報を提供して呉れるからである。

尚、本稿での翻訳に使用したテクストは前掲拙稿で使用したものと同一であるので、著者ハムドゥッラーと *Nuzhat* についての簡単な紹介等については昨年の拙稿を参照されたい。今回の訳は G. Le Strange 校訂本一〇〇—一〇六頁、Dabīrsiyāqī 校訂本一一七—一二六頁をもとにしている。

〈第八章：アルマンArman地方の諸所について〉

それは二つに分かれる。一つは大アルメニアArmīnīya al-Akbar、もう一つは小アルメニアArmīnīya al-Aṣghar である。小アルメニアはイーラーンには入らない。その東には大アルメニアがあり、ルームの諸地方はその北、シャーム（＝シリア）地方はその南、ルーム海はその西にある。スィースSīs、キプロスQubrus、トラブゾン(2)Ṭarabzūn 地方がその主要な地方である。小アルメニアからは毎年三トゥーマーンが地租(kharāj)としてイーラーンに与えられる。大アルメニアはイーラーンに入り、一つのトゥーマーンに数えられ、アフラートのトゥーマーンとして知られる。(3) 気候は大半が穏和である。その境域は小アルメニア、ルーム、ディヤール・バクル、クルディスターン、アーザルバーイジャーン、アッラーンに接する。その東西はエルズルムArzan al-Rūm からサルマースSalmās まで、その南北はアッラーンからアフラートの諸地方の果てに至る。その地方の首邑(dār al-mulk)はアフラートの町である。その徴税額は往時には今時の二〇〇トゥーマーンに近かったが、今や三九トゥーマーンである。

一、アフラートAkhlāṭ　第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七七度五五分、緯度は赤道より三八度二九分。その気候は穏和で、多くの園林があり、果実もまた良質で、量が多い。その徴税額は五一五〇〇ディーナールである。

二、ABTWT** ささやかな小市(qaṣaba)である。徴税額は一〇〇〇ディーナールである。

三、エルジンArjīsh　以前は町であった。経度は永遠諸島より七三度、緯度は赤道より三九度。Khwāja Tāj al-Dīn ʻAlīshāh Wazīr Tabrīzī(4)がそれを要塞化し、現在は堅固な城塞である。産物は穀物と綿。徴税額は八〇〇〇ディーナールである。

四、ARSWK** アフラート湖（＝ヴァン湖）岸にある一城塞で、堂々としたとてもよい所である。徴税額は一三六〇〇ディーナールである。

五、アラタグAlātāq　非常によい牧地で、水が豊富で狩猟地も多い。モンゴルMughūl のArghūn Khān(5)がそこに宮殿を造らせ、夏は大抵そこに居たものである。徴税額は六五〇〇ディーナールである。

六、ベルゲリBargirī　現在は小さな町であるが、かつては大きな町であった。丘の頂上にあり、アラタグに

発する大きな河が流れている。園林が多く、その中には種々の果実がある。町の中の一方には堅固な城塞がある。徴税額は二五〇〇〇ディーナールである。

七、BYAN** 小市であり、その中には園林と果実が多い。徴税額は一六〇〇〇ディーナールである。

八、KHRADYN** もと大きな町であったが、今は小さな町である。徴税額は五六〇〇ディーナールである。

九、ホシャブ Khūshāb 小市である。徴税額は一〇〇〇ディーナールである。

一〇、KHRMRMT** とLWQYAMAT**(6) 小さな町で、その中には園林と果実が多い。気候は極めて良好である。徴税額は一六六〇〇ディーナールである。

一一、スクマーナーバード* HNGMABAD(7) もと大きな町であったが、現在は一村落の規模にしか残っていない。徴税額は九〇〇ディーナールである。

一二、SLM** 小市であり、徴税額は七二〇〇ディーナールである。

一三、'AYN** 中位の町であり、徴税額は一五〇〇〇ディーナールである。

一四、Kabūd*(8) 小さな町であり、徴税額は四三〇〇ディーナールである。

一五、マラズギルド Malāzjird 第四気候帯に属する。経度は永遠諸島より七六度、緯度は赤道より三八度四五分。現在、堅固で堂々たる城塞がある。よい場所で、気候は良好である。徴税額は一四〇〇〇ディーナールである。

一六、ヴァン Wānとヴァスタン Wasṭān 第四気候帯に属する。ヴァンは城塞で、ヴァスタンはかつて大きな町であったが、現在は中位の町である。経度は永遠諸島より七三度、緯度は赤道より三七度。気候は極めて良好で、水はその境域にある山々に発し、アフラート湖に注いでいる河川に依っている。園林が多く、果実は豊富で、良質である。徴税額は五三四〇〇ディーナールである。

一七、ヴァラシギルド Walāshjird(9) 一城塞であり、その麓に小市がある。産物は穀物と綿で、果実は少い。徴税額は七〇〇〇ディーナールである。

〈第九章：ディヤール・バクル Diyār Bakr とラビーア Rabī'aについて〉

Ṣuwar al-Aqālīm の中ではそれをジャズィーラ Jazīra と呼んでいる。二九の町があり、温帯である。その境域

はルーム、アルマン、シャーム、クルディスターン、イラーク・アラブに連なる。マウスィルの町がこの地方の首邑である。この地方の徴税額はBadr al-Dīn Lu'lu'[10]の治世までのアタベグの時代には一〇〇〇トゥーマーンに達していたが、現在は一九二トゥーマーン半である。

一、マウスィルMawṣil　第四気候帯に属する。経度は永遠諸島より七七度、緯度は赤道より三五度三二分。ディジラ（＝ティグリス）河畔に位置する。その城壁の周囲は八〇〇〇歩である。高い会衆マスジドがあり、その中には切り出され、加工された石で出来たミフラーブがあるが、どの国でもそれ程に大きなものは木材からでも誰も造ったことがない。バドルッディーン・ルールーは高い建物を造らせたが、現在それらは大部分荒廃している。徴税額は三二八〇〇〇ディーナールである。

二、イルビールIrbil　第四気候帯に属する。経度は永遠諸島より七七度、緯度は赤道より三四度。大きな町であり、堅固な城塞を持つ。産物は穀物と綿で、良質である。徴税額は二二〇〇〇ディーナール。ディヤール・ラビーアに属する。

三、アルザンArzan　大きな町である。非常に堅固な城塞を有する。産物は穀物と綿で、良質である。徴税額は二七五五〇〇ディーナールである。

四、アーミドĀmid　ディヤール・バクルに属し、第四気候帯である。経度は永遠諸島より七三度四〇分、緯度は赤道より三五度。ディジラ河畔の中位の町である。徴税額は三〇〇〇〇ディーナールである。

五、BāṢBDH** 中位の町である。産物は穀物と綿で、果実は少い。徴税額は二四三〇〇ディーナールである。

六、BāẒR Nūḥ** 小さな町で、徴税額は一五〇〇〇ディーナールである。

七、Barṭallā　小市である。非常に清潔で、よい所である。良質の穀物、綿、果実が出来る。徴税額は一三二〇〇ディーナールである。

八、Bawāzīj　小さな町で、徴税額は一四〇〇〇ディーナールである。

九、JSAR** *Ṣuwar al-Aqālīm* では、小さな町であると言う。園林や山地内で耕作を行なっている。

一〇、ジャズィーラ・イブン・ウマルJazīra　第四気候帯に属する。Ardashīr Bābagān[11]が造らせた。大きな町であり、一〇〇近い村がその属地である。葡萄が多い。徴税額は一七〇二〇〇ディーナールである。

一一、Ḥānī とSīwān * 第四気候帯に属する中位の町

で、徴税額は一七一〇〇〇ディーナールである。

一二、ハッラーンḤarrān　第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七五度、緯度は赤道より三四度。Arfakhshad b.Sām b. Nūḥ[12] —彼に平安あれ—が造った。町の中には加工された石で出来た一城塞がある。その周囲は一三五〇歩で、城壁の高さは五〇ガズである。それは「星の城」Qal'a-yi Najm と呼ばれる。ハッラーンに属する村々のうちTalān 村については、そこが預言者イブラーヒームIbrāhīm Khalīl（＝アブラハム）—彼に平安あれ—の生誕地であると言われているが、本当の生誕地はBābil 地方のNūras 村であり、彼はTalān 村に匿われていたのである。ハッラーンにはサービー教徒Ṣābīyān の民が多かった。

一三、ヒスン・カイファーḤiṣn Kayfā　大きな町であったが、現在は一部は荒廃し、一部は繁栄している。徴税額は八二五〇〇ディーナールである。

一四、ハーブールKhābūr[13]　第四気候帯に属する。サーサーン朝のQubād b. Fīrūz が造らせた。

一五、ラースルアインRa's al-'Ayn　ディヤール・ラビーアに属する。第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七三度二〇分、緯度は赤道より三四度二〇分。その周囲は五〇〇〇歩である。気候は極めてよく、果実、葡萄、穀物、綿は良質である。

一六、ラッカRaqqa　第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七四度一七分、緯度は赤道より三四度四〇分。現在は荒廃している。ルーム人の言葉でQālānīqūs と呼ばれていた。*Risāla-yi Malikshāhī*[14] には次のような記事が出て来る。ハリーファQādir[15] の時代にこの地方のハーキムであったJa'barという名の者がラッカの町に面してフラート河の対岸に花崗岩で一城塞を築かせた。その周囲は一〇〇〇歩であった。百年後彼の孫Sābiq b.Ja'bar はその城塞に拠って追剝を働き、そのためシャーム、ディヤール・バクル、イラークの諸道は遮断された。セルジュク朝のスルターン、マリクシャーはその城塞を攻略し、サービクをその息子たちや与党と共に懲らしめるように命じた。その結果諸道は開通し、安全になった。その場所について不思議なことの一つに次のことがある。すなわち、その城塞はスィッフィーンṢiffīn の村に対面しているが、そこは信者の長ムルタダー・アリーMurtaḍā 'Alī —アッラーが彼に名誉を与えるように—とムアーウィヤが戦った戦場である。その近郊のフラート河畔に両軍の殉教者たちが埋葬されている殉教地(mashhad) があ

る。遠くからは棺と棺内の殉教者の遺体が見えたが、近くへ行くと何も見えなかったと云う。

一七、ルハーRuhā　第四気候帯に属する。*Risāla-yi Malikshāhī*には次のように出て来る。その周囲は五八〇〇歩であり、加工した石で造られている。その中にはやはり石造の教会(kanīsa)があり、その真中にはドームがある。ドームの下の空間は一〇〇ガズ以上ある、と。*Masālik al-Mamālik*によるとそれ以上に壮大でよい建築は世界中で誰も造ったことがなかったというが、現在は荒廃している。

一八、Sā'ird　第四気候帯に属する大きな町である。気候は良好である。ここでは良質の銅器が製造されている。杯は比類なく、有名である。徴税額は四六五〇〇ディーナールである。

一九、スィンジャールSinjār　ディヤール・ラビーアに属する。第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七五度二〇分、緯度は赤道より三五度。城壁は石と漆喰で造られ、周囲は三二〇〇歩である。一山上に位置し、キブラの方向に、或る列の家屋の屋根が他の列の家屋の地面になるように造られている。園林が多く、スンマークsummāq[16]やオリーヴ、無花果その他の果実が多く、葡萄も良質である。徴税額は一四七五〇〇ディーナールである。

二〇、Sūq Thamānīn　Jūdī山の麓にある一つの村である。預言者ヌーフNūḥ（＝ノア）－彼に平安あれ－が大洪水Ṭūfānから助かった時に造った村で、大洪水後地上に造られた最初の場所であるが、現在は荒廃している。

二一、'Aqr　第四気候帯に属する。カヤーニー朝のKaykāwus[17]が造った。丘上に位置し、葡萄製品が多いが、ワインは質が悪い。徴税額は二七四〇〇ディーナールである。

二二、イマーディーヤ'Imādīya　大きな町である。ダイラムの'Imād al-Dawla[18]が再建したので、それに因んでイマーディーヤとされた。気候は極めてよい。徴税額は六八〇〇〇ディーナールである。

二三、Qarqīsiyā　第四気候帯に属する。経度は永遠諸島より七四度四〇分、緯度は赤道より三四度二〇分。Qarqīsiyā b. Ṭahmūrath Diwband[19]に縁のある場所である。

二四、カルマリースKarmalīs　中位の町で、徴税額は一一二〇〇ディーナールである。

二五、マルディンMārdīn　ディヤール・ラビーアに

属する。第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七四度、緯度は赤道より三五度。丘上に築かれている。町の中の市街を見下す石の上に城塞がある。その地方にはSūr という名の河があり、ちょうどZanjān Rūd ほどである。マルディンの園林はこの河から水を得ている。それら園林とこの河に依存する土地は長さ一〇ファルサングに近く、幅約一ファルサングである。穀物、綿、果実を産する。この地方の産物の大半はあの河の賜物である。徴税額は二三六二〇〇ディーナールである。

二六、ムシMūsh　以前は町であったが、現在は荒廃している。よい草原で、極めて良好な牧草地である。その一方をディジラ河が、もう一方をフラート河が流れている。徴税額は六九五〇〇ディーナールである。

二七、マイヤーファーリキーンMayyāfāriqīn　ディヤール・ラビーアに属する。第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七五度一五分、緯度は赤道より三八度。大きな町であり、気候は良好。果実が豊富である。徴税額は二二四〇〇〇ディーナールである。

二八、ナスィービーンNaṣībīn　ディヤール・ラビーアに属する。第四気候帯に属し、経度は永遠諸島より七五度、緯度は赤道より三五度。その城壁の周囲は六五〇〇歩であり、水はHirmās 河に依っている。気候はひどい(muta'affin)ものである。産物は果実と葡萄が多い。そのワインは良質で、気候のひどさの害を防いで呉れている。この地の薔薇はイーラーンザミーンの薔薇のうち最良のものである。ここには蠍や蚊が多く、蠍は人を殺す。*Jāmi' al-Ḥikāyāt*には次のように出て来る。かつて呪文により、一切町の中に入らないよう蚊と蝗を封じ込めた。Ṣalāḥ al-Dīn Yūsuf[20]の治世にそこの城壁を建設した際、密封した壺が見つかった。人々はそれを財宝と想像して、取り上げ開封した。蚊と蝗を見つけて、再び地上に置いた。こうしてその営為は無に帰した。

二九、ニネヴェNīnawī　ディジラ河畔に位置する。その周囲は六〇〇〇歩である。預言者ユーヌスYūnus(＝ヨナ)－彼に平安あれ－の殉教地がこの町の南方にある。町からその殉教地まで、増減なくきっかり一〇〇〇歩である。

＊は位置不詳であることを示す。

＊＊は位置及び地名の読み方共に不詳であることを示す。

注

(1) 昨年の拙稿の補訂。九二頁上段「はじめに」の本文五行目「カズヴィーニー」の右下に注番号(1)を記入。九三頁下段左から六行目「学者達は」のあとに「言ってきた、」を追加。九六頁上段左から四行目「tiryāk」の右下に注番号(19)を記入。九七頁下段左から八行目「緯度は」のあと「赤道より」を追加。一〇〇頁上段(注)(20)「BWASYの読み」を「BWASYの表記」と訂正。同頁下段(注)(28)末尾に「Ibn Bibī, pp. 607, 689」を追加。

(2) ルーム海、すなわち地中海に面する小アルメニアに黒海岸の都市であるトラブゾンの名が見られるのは余りにも不自然である。ここでいうトラブゾンとは小アルメニアの都市タルスース Ṭarsūs の書き誤りではないかと推測される。

(3) ここでいう「トゥーマーン」とは一万ディーナールの意味ではなく、モンゴル支配時代の一行政単位として、例えば「軍管区」のような意味で用いられている。

(4) イルハン国のÖljaitü（在位一三〇四－一六）、Abū Sa'īd（在位一三一七－三五）の両ハンに仕えたワズィール。一三二四年没。ウルジェイトゥ・ハンの時代にアリーシャーは有名な歴史家ラシードゥッディーンと共にワズィール職を分掌したが、ウルジェイトゥ・ハンの死後、ラシードをハン毒殺の罪で告発し、このイルハン国最大の歴史家を刑死させた。'Alīšāh, *Encyclopaedia Iranica*(B. Spuler 執筆)

(5) 第四代イルハン（在位一二八四－九一）。フラグの子アバカの長子。ガザン、ウルジェイトゥ兄弟の父。歴代のイルハンがアラタグに夏営していたことについては、本田實信「イルハンの冬営地・夏営地」『東洋史研究』三四－四、一九七六、八九－九〇頁参照。

(6) *Nuzhat* のDabīrsiyāqī校訂本、一一八頁ではこの両所をハルプトKhartabirt及びトカトTūqāt としている。前者がハルプトに当たる可能性はなきにしもあらずであるが、後者をトカトと読むことは到底不可能である。ルームにあるトカトは歴史的にもアルメニアに含まれたことはない。

(7) この表記がスクマーナーバードSukmānābādを写したのではないかと考えられる根拠は二つある。第一はアラブ文字のアルファベット順からみてKHとSの間にHNG …で始まる語が入るのは不自然であるということ。第二にSKMANABADとHNGMABADの両語の冒頭は筆写の段階で酷似する可能性があり、後半もNAの部分が脱落したと考えれば両語の字形は殆んど同一になるということである。さらにHNGMABADなる地名は同時代史料には現れないのに対し、スクマーナーバードはナサウィーの『スルターン、ジャラールッディーン伝』に二度現れる。それに拠ればホラズムシャー、ジャラールッディーンはヤッス・チメンの敗戦後アフラートを経てこの

町に立寄った後ホーイKhūyへ向かったという。Ḥāfiẓ Aḥmad Ḥamdī校訂本Cairo, 1953, 三三三頁。この記述からスクマーナーバードはアフラートとホーイの間、大アルメニアの境域に位置していたことは明らかである。尚、ホラズムシャー、ジャラールッディーンの西アジアにおける活動及びヤッス・チメンの戦については拙稿「ルーム・サルタナートとホラズムシャー」『東洋史研究』四七―一、一九八八、を参照。

(8) Kabūdはペルシア語で「紺青色の」という意味の形容詞である。西暦一〇世紀後半の著作であるアブー・ドゥラフAbū Dulafの『第二の書簡』ではウルミヤ湖畔にKabūdhānという名の山があることを伝えている。Kabūdという名の町も或いはこの山、又はウルミヤ湖と関連する地名である可能性もある。イスラーム地理書・旅行記研究会訳注『アブー・ドゥラフ　イラン旅行記』京都、一九八八、一三頁。

(9) この地名をもつ場所はイスラーム世界に何箇所かある。ヤークートの*Muʿjam al-Buldān*には四箇所のヴァラシギルドが挙げられており、それらはハマダーンとキルマーンシャーハーン間、バルフ地方、キルマーン地方とアフラート地方にあるという。F. Wüstenfeld　校訂本第四巻、Leipzig　一八六九、九三九頁。ここでいうヴァラシギルドは無論、最後のもので、マラズギルド北方、エルズルム東方の、現名Eleşkirtに当たる。Ibn Bībī, p. 425, H. Hübschmann, Die Altarmenischen Ortsnamen, *Indogermanische Forschungen*, Band XVI, 1904, SS. 468－469. 尚、昨年の拙稿で位置不詳としたAWNYK　(注(13))もこの論文の附図にはAvnik　としてヴァラシギルド・エルズルムのほぼ中間に載せられている。

(10) マウスィルのザンギー朝アタベグ政権第六代アルスランシャー（在位一一九三―一二一一）の奴隷出身で、一二二二年に主家が断絶すると、自らアタベグとなり、マリク・ラヒームal-Malik al-Raḥīmを称した人物。一二五九年没。

(11) サーサーン朝初代の王。在位二二四―四〇年。

(12) アラブの伝承によれば、預言者ヌーフの孫、サーム（＝セム）の子で、イブラーヒームの一〇代前の先祖。ユダヤ人の伝承では四三八年生きたと言われる。Ibn al-Athīr, *al-Kāmil fī al-Taʾrīkh*, C. J. Tornberg校訂本第一巻Lugduni Batavorum, 1867, 七八―八二頁。

(13) サーサーン朝第二〇代の王。在位四八八―九六、四九九―五三一年。

(14) *Nuzhat*著作の際、重要な情報源となった作品で、随所に引用される。セルジュク朝のスルターン、マリクシャー（在位一〇七二―九二）の支配領域を描写したもの。現在には伝わらない。

(15) アッバース朝の第二五代ハリーファ。在位九九一―一〇三一年。

(16) 漆科の植物名で、非常に酸味の強い実は、乾燥させ

粉に挽かれた後、タイムと一緒に香辛料として用いられるという。

(17) イランの伝説上のカヤーニー朝第二代の王で、カイクバードKayqubād王の孫。有名なフィルダウスィーの『シャー・ナーマ』に登場する英雄ルスタムRustamが活躍するのはこのカイカーウス王の時代のこととされる。

(18) ダイラム出身のブワイフ家三兄弟の一人。本名はアリー。ファールス、フーズィスターン、ジバールを領有。在位九三二―四九年。

(19) Qarqīsiyā b. Ṭahmūrath の名はヤークートの *Muʿjam al-Buldān* に現れるだけで、他史料には見られない。第四巻六五―六六頁、タフムーラスの名はイランの伝説上のピーシダーディー朝の王として知られ、悪魔(dīw)を服従させたため、Dīwbandの異名がある。

(20) アイユーブ朝の初代al-Malik al-Nāṣir。在位一一六九―九三年。「サラディン」として有名。

(本稿は昭和六三年度金谷治教授を研究代表者とする文部省科学研究費の筆者分担の成果の一部である。)